

第37回

第5章 現代の課題を考える

生命と倫理

今回学ぶこと

科学技術の発展によって、人の生・老・病・死の状況が変わり、バイオエシックスが誕生することになった背景とその内容について学習する。具体的な生殖技術の進展とその問題点、また終末医療における尊厳死などの問題を理解し、生命の質と生命の尊厳の対立について考える。



講師
千田有紀

今回のキーワード！

生命倫理〔学〕（バイオエシックス）／生殖技術／尊厳死／ノーマライゼーション／生命の質／生命の尊厳

生命科学の発展と生命倫理

近年の生命科学の発展には、目覚ましいものがある。1997年には、クローン技術を使い、成体からまったく同じ遺伝子をもった個体として作り出された羊のドリーが誕生していることが発表された。2000年に入るとヒトゲノム解析などの技術も進み、その後、体細胞に遺伝子を導入してさまざまな細胞に分化させる能力をもつiPS細胞（人工多能性幹細胞）の開発も、成功した。

このような新しい技術の進展により、人間の生・老・病・死をめぐって、新たな倫理が必要となってきた。このようなバイオテクノロジーや先端的な医療技術をめぐる人間の行為の倫理的・法的・社会的な問題、その体系的な研究は、バイオエシックス、つまり生命倫理〔学〕と呼ばれている。

生殖技術と家族

日本でも、体外受精や顕微授精などの生殖補助医療によって生まれる子どもの割合は、どんどん増加している。このような生殖技術の進歩により、理論上、生殖技術を利用して生まれた子どもには、5人の親がいることになる。通常は2人であることが多い親は、遺伝子上の父、遺伝子上の母、妊娠・出産の母（代理母）、育ての父、育ての母とに分かれるのである。このことは新しい問題を生み、「家族」という概念が、揺らぎはじめています。

また生殖技術を利用した妊娠出産の問題は、生殖医療のビジネス化や経済格差などのさまざまな問題をはらんでいる。また出生前診断技術などの進展は、「完璧な子ども」への願望をも強めている。私たちは、家族とは何か、親と子どもの絆とは何か、子どもが欲しいという欲望とはどのようなものなのか、といった根本的な問いに直面せざるを得ない。

生命の質と生命の尊厳

生命と医療をめぐる問題はさまざま存在している。まず患者を保護されるべきものと考え、家父長的な権威を背景に、医者が権威的にいろいろなことを決めたりしてしまうというパターンリズムは、時として見受けられる。一方、医師などが情報を与えて十分に説明してから、患者が治療の方針に同意するという、インフォームド・コンセントも重視されるようになってきている。また最期は人間らしい尊厳をもって自然に死にたいという尊厳死の問題もある。生命維持治療や苦痛緩和の処置など、末期の措置をどうしてほしいか、あらかじめ意思表示しておく文書のこと「リビングウィル」と呼ばれている。

ただ生きるのではなく、死ぬまでに残された時間をよりよく生きたいという考え方は、クオリティオブライフ（quality of life の頭文字をとって：QOL）、つまり生命の質、生活の質、といわれます。また反対に人間の生命を神聖で絶対的なものとする考え方は、生命の尊厳、サンクティティオブライフ（sanctity of life 同：SOL）と呼ばれている。